

おうむ

近眼の鸚鵡

人間文化コース教官 加藤 徹

平和公園の元安橋のたもとに「レストハウス」という古ぼけた小さな建物がある。原爆ドームとは元安川をはさんで斜め向かい側の位置にある。被爆建築であるが、観光案内所や「おみやげ」の店が入っていて、今も現役の休憩所兼事務所として機能している。このレストハウスは、対岸の原爆ドームが世界遺産に登録されたのとは対照的に、老朽化のため、いずれ取り壊される予定だという。

ぼくは東千田での夜間の授業のあとなど、ときたま閉館後の無人のレストハウスの前を自転車で通りかかることがある。そんなとき、自転車をとめ、五十四年前の惨状を思う。

昭和二十年のあの日の朝。当時「広島県燃料配給統制組合本部」だったこの建物も閃光を浴びた。爆心地からわずか百メートル余という至近距離だったが、この建物の中にいた男女のうち八人が即死をまぬかれ、血を流しながら外に這い出した。あたりは、朝だといふのに三日月の夜ほどの暗さで、百七十メートル離れた対岸の産業奨励館（原爆ドーム）も、崩れかけてはいたがまだ火の手は上がっておらず、深い静寂につつまれていた。しばらくして、あたりに火がつきはじめた。爆発時に「組合本部」の地下室にいたため軽傷で済んだ一人の男性が、救援を求めるため、火の粉が舞い始めた暗闇の廃墟の中を、広島市西部の己斐方面に向かった。結局、この男性が唯一の生存者になった（野村英三さん。1982年に84歳で死去）。――

その「現場」は、たしかにここだ。現に、金属製の説明プレートも立っている。頭ではわかる。しかし、イメージできない。どうしても、去年みた外国映画ほどの現実感すらわからないのだ。……それは別に、夜の平和公園のコンクリートの上をすべる帽子の若者たち

のスケートボードの音のせいではない。また、川むこうで夜空を無遠慮に照らしあげている野球場のライトのせいでもない。おそらく、われわれ人間ひとりひとりが本質的にもつ氷のような「孤独」のせいなのだ。われわれは平素、自分がこの透明な孤独の氷に包まれていることを忘れている。例外は、昼間、緑の木陰で修学旅行の中高生たちに静かに被爆体験を語るボランティアのお年寄りたちかもしれない。

知るだけでは足りない。実感できねばいけないのである。否、実感でも不十分だ。思い出さねばならぬのだろう。たとえそれが、自分の生まれる前の、遠い他人の記憶であったとしても。

もし、文学とか音楽などというものに何か価値があるのだとしたら、それは、人間が本質的にもつ氷のような孤独を、一瞬だけ癒してくれる点にあるのだろう。ぼくは明日も大学の教壇に立つ。そして「中国文学」という看板を見て集まった学生さんを前に「文学とは『一瞬の癒し』のために、人間の秘密を熟知していた先人たちが作った装置である」などとご託を並べるのだ。本当のところは、ぼくもまた、夜のレストハウスを前に途方にくれる近眼の鸚鵡にすぎないのだが。……



せいたかあわだちそうとヒメジョオン

松永孝治（自然環境研究コース 4年）

最近初めてセイタカアワダチソウをした。昔から名前は聞いたことがあったし、小さい頃その植物をそれと知らずに抜いて、振り回した記憶もあった。だがしかし、この度22歳にしてようやくセイタカアワダチソウなるものの名前と実体が一致した。なるほど確かに至る所に生えている。帰化植物として注目されるわけだと思った。この植物は空に向かって一直線に伸び、異常な速度で生長する。他の植物の生長を阻害する化学物質を出し、自らはすぐと育ち、辺り一面を泡立ち畠にしてしまう。10月にもなれば黄色い花をつける。

もう一つ最近知った植物にヒメジョオンがある。アワダチソウと同じくキク科の植物で初夏に花を付ける。白い控えめな花をいくつも付ける。アワダチソウと同じように広島大学の構内の至る所で目に付く。この手の植物は攪乱地依存型の生存戦略をしているらしい。他の植物と純粋な競争を行うというよりは、他の植物の勢力が弱い場所（例えば攪乱地）に、偶然たどり着いた種子が発芽し、花を付け、実を飛ばし、次の攪乱地にたどり着いた種子が、子孫を残していく。そんな生活を送り続けることで生き残り戦略をたてて、生き続けている。しかもそんな生き残り方で日本全土に分布をひろげている。

植物の遷移の話によると、これら草本の植生のあとに陽樹の木本などが入り、やがて陰樹も生え始め森林となっていく。常に隙間的な空間を生き続けていく上記の植物のような生き方は、一見不安定そうに見えるが、人間が土地をいじくり続ける現代に置いては実は最も有効な生き残り方なのだろう、とモノの本に書いてあった。

僕自身の専門は一応生態学で自然に目を向ける機会が最近増えたのだが、動植物の生き

方を人間の生活に言い換えてみると面白い見方が出来ることがあると最近思う。例えは人間でも同じように隙間を縫いながら生計を立てていると見立てられる人は……。隙間産業に着手して成功して生計を立てて人ならうそ見立ててもよさそうだ。こんな人々はヒメジョオンの人間に見れる（何やってんだか……我ながらとたまに思う）。実際にこういった人々は、他の人々や企業が手を着けていなかった、もしくは着けられなかった空間に一番に飛び込むという点で、そして何よりその生命力・生活力が溢れている点で、そんな植物に置き換えられるだろう。もともと動植物も、個体が生き残ることと子孫を残して続いていることが根本にあるから理屈をつければどんな風にも言い換えられるのかもしれない。

さてさて、平成8年度に入学した僕も今年で卒論生になり、（この号が発刊される頃には、卒論できっと大わらわなのでしょう。）今の時期周りの友人は就職内定をもらったりもらわなかつたり、大学院の入試勉強をしたりしてなつたりしています。大学後の進路というものが、リアルに迫ってきて、それこそみんな千差万別の道を各々選ぶわけです。様々な植物が様々な生存戦略を探るようですね。そんな折にふとこれらの自分の生き方のことを考えます。将来設計とかいうやつですね。ま、設計したところでその通りにいくわけは勿論ないんでしょうが。……難しいモノですね。将来の僕は例の見方でどんな植物の人間になるのか。僕自身男だから「立てばー、座ればー、歩く姿は百合の花」じゃないですが、自分の足跡を眺めたときに優雅な植物にたとえることが出来るような生き方をしたいのですね。

はまうずてつあ 浜渦哲雄研究室

社会科学コース 教授 (A807)

一番右が先生。関西大学文学部尾崎セミとの
フィリピン見学旅行。(ベンケット大学にて)



研究テーマは？

目下の研究テーマはイギリスの植民地統治とアジアの環境問題。2冊目の成果である『大英帝国のインド総督』は7月末に中央公論新社より出る予定。日本の研究が遅れている『イギリスインド会社』についても年内脱稿を目指して執筆中。アジアの環境問題は松岡先生の手伝いで、今年度は自動車の公害対策を担当。

先生の研究室の特徴は？

ゼミ生はやることがはっきりしておれば、自分の専門と直接関係がなくても受け入れたのでさまざま。わがゼミの特徴といえば毎年アジア旅行をすることと、英語のテキストを使うことか。メールがつながっている卒業生に現在の仕事と引っかけて書いてもらい、研究室紹介することにしよう。

私は、浜渦ゼミ3代目(04)の伊藤健司です。浜渦ゼミで石油に魅せられ、グローバルな仕事に就きたいと思い立ち石油会社で働いています。石油会社に就職が決まった直後から、「石油会社に行くのなら英語ができないとダメだ」と浜渦先生に「英文解説特訓」を受けました。今は、就職4年目ですが英語とは無縁の名古屋支店で名古屋弁を駆使しながら下積みをやっています。「海外希望」を入社当初から出していますので、今度の転勤でうまく行けば海外部（又は海外担当部署）へ行けるかどうかというところです。これまで、石油会社の「海外」といえば、原油の買い付けの仕事が大半でしたが、今は、石油製品販売の方へシフトしています。日本国内の競争激化が、海外勤務の追い風となっています。「特訓」の成果を生かす時が来ることを切望しています。

(04 伊藤 健司)

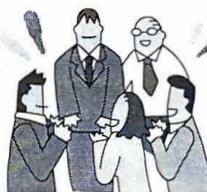
Ogenki desuka? How is life going on over there? I really hope that both of you are the pinkest health. As for me here, everything's fine. I have just finished my project given by my Personnel General Manager and my boss. It was regarding how to address current issues pertaining to Training and propose the counter-measures to overcome that problem. Fuhh... really, really tiring! For the past two weeks, I had to "overnight" at office almost until 12 o'clock. Worst... until 1:30 a.m. Glad, now everything's over and the result... I think not bad. He... he... he...

(05 Noor Aizah Adas)

4月1日の入社式の答辞も大成功に終わり、会社の中では有名人になってしまいました。なぜか今度、BBCが取材に来るらしいんです。松下電器の女の子が答辞を言った、というのに関心を持ったみたいです。配属は海外部になりました。オフィスは心斎橋にあるんですよー。いいところですよね。

今は、製造実習の真っ最中です。毎日5時過ぎに起きて、枚方から茨木のテレビ事業場に行ってます。工場の朝は早いです。これが6月1日まであって、その後はいよいよ販売実習です。中国に行くことが決まりました。だけど、どこの都市かまだ分かりません。6月19日か20日に出発して、8月の初めに帰ってきます。ものすごく楽しみです。

(04 佐々木美保)



ゼミと現在の仕事を引っかけて何か書いてくれないといわれたのですが、現在はゲーム開発でCGをやっており、面白いくらい関係のない仕事をしています(笑)。ツールやプラグインで外国産のものの英文マニュアルが読めるといって重宝がられていることぐらいでしょうか。学生時代、パソコンくらい使えるようになれ、とよく言われましたがおかげさまで今は体の一部です。浜渦ゼミは毎年不思議にパワフルな人材が集まって来て、雰囲気が大変楽しかったのを覚えています。この伝統(?)がずっと続くといいですね。

(04 武長 綾子)

私のいる(株)リクルートコンピュータパブリッシングは、基本的に出版物製作～セイハン・印刷までする会社です。私の担当しているクライアントとしては、昨年受注したアートネイチャー東京、今年から担当になったヒューマン・アカデミーが主になります。アートネイチャーでは、顧客とのリレーションシップ構築という目的で会報誌を作っています。ヒューマン・アカデミーでは各種パンフレットの製作から、書店、カフェショップ、その他での広告展開を提案しています。ゼミで研究したこと今後の仕事はほとんど関係ありません。また、ゼミで一生懸命(?)読んだ英語もほとんど使うことはありません。ただ、日経新聞を学生のころから読んでいたこと、世界経済、日本経済への興味が今の仕事になっていると思います。商機を見つけられるかどうかが今の仕事では命なので。

(05 柳井 友裕)

授業ではゼミ3コマも含めて、週12コマもあるのですが、阪大の経営学は、とにかくすべてが数学ばかり。終了に必要な30単位のうち、数学の必修が8単位もあります。その他のマーケティングやオペレーションズ・リサーチ、ファイナンスの授業も、かなり数学に特化した手法をとっているようで、神戸大(経営)から来た友達は、「神大と全然違う!」と驚いていました。

ゼミ生は全部で8人。うち留学生が2人です。これは研究科の中ではかなり大所帯だそうですが、先生が持つ学部のゼミが、3、4年生合わせて、なんと40名もいることを知って、私はたまげてしまいました。それに比べると、3年の頃、浜渦先生について、3~4人でみっちり輪読させていたいた頃がとても懐かしくなるし、総合の環境ってすごく恵まれていたんだなあ、と、改めて幸せに思いました。

(06 和田菜穂子)

あらせの跡や 樹齢延歳研究室

人間文化コース 教授 (A522)



先生の専門の話を聞かせて下さい

フランス文学です。特に十七世紀の演劇です。あまり名前は聞いたことが無いかもしれません、コルネイユと言う人物についての研究をしています。三十年戦争というヨーロッパ全体を巻き込んだ大戦争が十七世紀にありました。生活環境の変化と時代の変化によって、彼の作風は身近なものから政治問題などを扱った少し深刻な悲劇に変わっていきます。戦争が終わってしまって、フランスが落ち着いてくると長いこと活躍していたコルネイユの芝居もどんどん観客に見放されてしまいます。コルネイユの演劇が見直されるのは必ず世界大戦のあと（例えば第二次世界大戦のあとなど）で、時代は繰り返すということを体験して感じられるという所が面白いです。

この研究をやろうと思ったきっかけは何ですか？

あまり人のやっていないところをやろうと思ってこの研究を始めました。あまりやってる人が少ないのでやっぱり最初は厳しかったです。やっていくうちに、コルネイユの演劇は古代のローマの時代を舞台としていたのですが、観客にとっては現代性があり、生きている時代を思わせるところがあったんだということが分かってきました。

先生の著書があればご紹介下さい。

- ・『コルネイユの演劇またはリシュリューの時代のフランス』 駿河台出版社
- ・『演劇と映画』 青木孝夫編 晃洋書房
- 「ピエール・コルネイユとフロンドの乱」

先生の趣味は何ですか？

あまり趣味がない人なんです。昔は演劇を鑑賞するのが好きでした。今は敢えて言えば散歩と庭いじりでしょうか。

これからどんなことを研究したいと思われますか？

学際的研究ということで広い視野を持つために、経済とまではいかないけれど、時代の社会的な風俗とか経済とかを勉強して総合的に理解していくみたいです。そうすることによって、十七世紀のことがもっと分かってくるでしょうし、コルネイユについても新しいものが見えてくるかもしれません。

(取材：三浦和歌子)

ゆのかわ 布川 弘研究室

地域文化コース 助教授 (A515)

専門

主な研究テーマは、日本近代における都市「下層社会」の形成と構造です。これまで主として明治・大正期の神戸における「下層社会」の形成と構造を研究してきました。アプローチの方法としては、「社会史」の方法にずっとこだわってきました。その方法とは、社会的結合関係の特質や人々の心性を重視するということです。また、「下層社会」の形成が国民国家の形成過程と深い関係にあるということを前提にした上で、国民国家とはいかなるものなのかという問題を解明することも課題としています。



右から2番目が先生

この専門を選んだきっかけ

義父が電気機器の修理を仕事としており、私も二年間ほどその仕事の手伝いをしておりました。その折りに、業務用クーラーの洗浄や様々な電化製品の据え付け・取り替えをしながら、神戸のいわゆる「下町」を歩いたのですが、その時々々な体験をすることができました。その中で特に印象に残ったのが、鉄道の高架下に住んでいた、或る在日の家族の居住環境でした。それと、自分の幼い頃の環境などがダブって、今の専門を選んで、いわば自分探しを始めたというのが真相なのかなあと、今頃になって思っている次第です。

先生のゼミ生の研究内容

- 1900年前後の台湾統治 (とりわけ教育政策)
 幕末の「ええじゃないか」という行動にあらわれた民衆の心性

略歴

- 1980年 金沢大学法文学部史学科卒業。
 1982年 金沢大学文学研究科（修士課程）修了。
 1990年 神戸大学院文化学研究科（博士課程）単位取得退学。

研究生の教官に対する印象

フランクで顔のデカイ人、ざっくばらんで誰とでも仲良くなれる人、先生らしくない人

先生の著書

- 神戸における都市「下層社会」の形成と構造 (1993)

飢餓・都市・文化～「都市論」を越えて～ (1993)

賀川豊彦初期史料集 (1991)

先生の自己PR

宇多田ヒカルをまともに唄える教官は僕ぐらいしかいません！

先生の将来の夢

世界的にメジャーになること。(笑)

学生に一言

「まあ、のんびりやれ。一番ゆっくり考えて物事をやれる時期だから。」

(取材：前田健太郎・秋寄喜多郎)

ひるてともひこ 平手友彦研究室

外国语コース第III群 助教授 (A521)
(フランス語主専攻)



先生の専門は何ですか？

フランス16世紀の物語作家フランソワ・ラブレーを研究しています。彼の作品『ガルガンチュア・パンタグリュエル物語』はおそらくフランス文学史上最初の散文長編物語で、その内容は中世以来の騎士道物語の枠組みを探りながら、当時の宗教改革で揺れる現実を荒唐無稽な笑いとスカトロジーで絡ませながら、時には「良心なき智識は靈魂の荒廃に外ならざれば」という芥子で味付けをした物語です。私の研究領域はこの物語の成立を探ることですが、学位論文ではラブレーの語彙と文法的特徴の膨大なデータを分析して、『ラブレー文法辞典』なるものの作成を試みたこともあります。最近は少し横道にそれで、ボッカチオ作『デカメロン』のフランス語訳を題材にした16世紀初期の翻訳と出版の問題を研究しています。現在『デカメロン』の仏訳を初めて出版したパリのアントワーヌ・ヴェラールという出版・書籍商に関する論文を準備しています。

先生が今の専門に進んだきっかけは何ですか？

ルネサンスに興味を持ったのは学部生の頃で、当時愛読していた福永武彦、中村慎一郎、加藤周一を読み進むうちに彼らの先生でもあったフランス・ルネサンス研究者渡辺一夫を知りました。学部3年生の夏にトリノの大理石工場で2ヶ月バイトをして、強烈な「イタリア洗礼」を受けたことが大きく、それからというものフランスをやりながらも気持ちちはいつも「南の国」に向いているのです。しかし、この「イタリア行き」の最大のきっかけは恩師の先生（故新村猛先生）の蔵書整理をお手伝いした際に、『デカメロン』関係の文献を多数知ったことでした。

学生の留学についてどうお考えですか？

物理的条件が許す限りどんどんしてください。色々見て、聞いて、食べて、しっかり「孤独」になって、自分で動かなければ「世界」は変わらないことを心ゆくまで実感して下さい。

学生に一言

バイト、サークル、資格取得も大切かもしれません、皆さんには「知的好奇心の鍛磨」という大学生の「本道」を進んでもらいたいと思います。見つけたもので、面白そうなものはマルを付けて次々にどんどん溜めておく。じっくり熟成させてもいいし、すぐにコルクを抜いてもよし。勿論失敗があるかもしれません。でもあまり気にしなくていいと思います。私自身、学部の頃はあまり眞面目な学生ではありませんでしたから小声でそっと言いますが、自分で選択した学問領域はしっかり勉強して下さい。

(取材：田中 真弓)

しま 島 唯 だら 史 唯史研究室

数理情報科学コース 助教授 (C717)



研究内容は？

確率過程論

フラクタル……自己相似性を持っている変わった図形の上をフラフラとランダムに動く粒子の運動を調べています。

将来の夢は 何ですか？

もっと、いろいろな仕事がしたいです。解析方面だけではなく代数の方もやってみたいですね。

この研究を
始めたきっかけは？
学生時代、指導を受けていた先生に今的研究内容を紹介されたのをきっかけに始めました。



先生のゼミ生は、今どんなことをしていますか？

週に1、2回セミナーをしています。確率論の本を読んでもらったり、面白い問題があったら、それについて解説をしてもらっています。

学生に一言お願いします。

あまり多くは望みませんが、何事においても自分で考える習慣をつけてください。例えば、学問に関しては、自分でいろいろ考えることにより、先生ともうまく付き合えるようになるのではないかでしょうか？あと、年をとるにつれ、束縛されるものが多くなります。（仕事、結婚など。）だから、今自分の自由な時間を大切に使って下さい。

(取材：北 いづみ)

やましろかずあ はりま ゆき
山下和男・播磨 裕
 <ぬぎよしひと
功刀義人研究室

山下 和男 物質生命科学コース教授 (C221)
 播磨 裕 物質生命科学コース助教授 (C223)
 功刀 義人 物質生命科学コース助手 (C220)

先生の専門は？

電気化学。応用物理化学。物理化学。



写真右から2番目が山下先生、左から2番目が播磨先生、左から3番目が功刀先生。

どんなことを研究していますか？

光エネルギーの電気エネルギーあるいは化学エネルギーへの変換・貯蔵、光情報記録・表示、センサーなどの光学的・電気的機能をもつ機能性分子材料を研究開発している。

これから、どんなことを研究していきたいと思っていますか？

自然にやさしく、環境に調和した機能性物質、特に有機分子材料の創製を目指した開発研究の基礎と応用に関する研究をしたい。

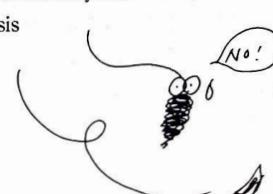
先生の今の専門に進んだきっかけは何ですか？

10年20年と同じ研究を続けてきたわけではなく、いろいろな研究をやりながら今にたどりついている。総合科学部にきたのが一つの動機もあるし、この学部の目途とするものの中で、私達に何ができるかと考えた結果として、このテーマにたどりついた。

先生の著書

〈山下 和男〉

- * Electrical and Optical Functions of Thin Solid Films of Organic Macrocycles
 - * Use of Ternary Mixture as a Solevent in Polarographic Analysis
 - * 导電性有機薄膜の機能と設計
 - * 分子集合体の光機能
 - * 分子光機能材料としてのホルフィリン
- 〈山下 和男、播磨 裕 共著〉
- * 有機分子集合体がおりなす光機能
 - * 物理化学の基礎 (教科書)



先生のゼミ生はどんなことを研究していますか？

- * 有機半導体の伝導性の制御と光電変換デバイス等への応用
- * 有機半導体中のキャリア移動機構の解明
- * Siを含む新しい機能性高分子の探索と電気化学的、光・電子的性質の解明
- * 有機半導体および有機/金属界面のエネルギー構造の解明と光電子デバイスへの応用

学生に一言お願いします。

可能性は無限なので、広い視野に立って勉強してもらいたい。やる意志の明確さがあれば、どんな勉強をしてきたかは関係ないから、やる気をもってきてほしい。

大学にきた目的意識をハッキリともってほしい。

やりたいこと（専門にしたいことや職業など）を、大学にいる間にできるだけ早く見つけて、それを成し遂げるために学力をつけてほしい。

先生の略歴

〈山下 和男〉

京都大学大学院理学研究科博士課程修了。アメリカ合衆国へ研究員として渡り、その大学教授や博士と共同研究したこともある。1986年広島大学総合科学部となり、今に至る。

〈播磨 裕〉

東京工業大学大学院総合理工学研究科博士課程修了。1985年から1987年まで、カナダ・サイモンフレーザー大学客員研究員となる。平成元年、広島大学総合科学部助教授となり、今に至る。

〈功刀 義人〉

東京工業大学大学院総合理工学研究科博士課程修了。1992年より、広島大学総合科学部助手となる。1996年から1998年まで、アメリカ合衆国ミネソタ大学の客員研究員となり、今に至る。

先生のオフィス・アワー

3人とも随時

取材を終えて

先生方は、研究分野においてお互い協力し、多くは複数の先生方（一人の場合もあるが）とでグループ指導している。これは総合科学部の特徴でもあるわけだから、そのところを強調してほしいということでした。

(取材：岡田 聖香)

あんどうまさあき 安藤正昭研究室

生体行動科学コース 教授 (B411)



研究の内容

環境が変わる時（特に陸上にあがる時）に生体がいかに水を保持するのかということを研究しています。我々の祖先は海から丘に上がってきました。丘という環境は非常に水が少ない環境です。水を体の中に維持しなければ生きていけないので、維持する仕組みがあるはずです。その仕組みを理解したい、それがだいたい私の研究のテーマです。

生理学とは？

生理学という学問自体は歴史が古く、人間の生きている仕組みを明らかにするもので、もともと医学部のベーシックな学問です。生きていることを理解する時、一つの細胞だけの知識では理解できません。生きものが生きている事を考える時には、なぜ心臓は動いてるかという事を知らないといけないし、心臓がこう動いてる時には胃の方はこうなってるという事も知らないといけません。体の中の臓器は連動しています。そしてそれをまとめてるホルモンと神経系とその上にある脳、この支配関係というか全体のシステムを理解できたら生きものが理解できるんじゃないかなと思って仕事をやっています。

学生の研究

ほとんどの学生は今ウナギの研究をしています。ウナギの食道をやる人、胃をやる人、腸をやる人、脳をやる人、エラをやる人というふうにそれぞれが分担しているのです。今ちょっとエラをやる人が不足しています。私のドアの前のところにはウナギの絵が描いてあって、受け持っているパートを示しています。自分の受け持つパートだけでは一人前ではありません。これをやりながら、隣の人もやってる、仕事やなんかに興味を持ってそこから知識を得て下さい。自分はその一部しかやってないということを理解して下さい。そういう意味がそこには含まれています。

学生に一言

最近の学生さんは、自分が何がやりたいというその意欲が足らないような気がします。もう少し自分の頭で考えて疑問を持ち、自分の頭で疑問を考えたら、自分が何をしなきゃいけないかっていうのがわかってくると思うんです。そして、自分で何をしたい、しなきゃいかんというふうに思って動いてほしいです。

(取材：近澤 康平)

とがしあづみ 富樫一巳研究室

自然環境研究コース 助教授 (C423)



一番右が先生

専門分野は？

昆虫生態学（昆虫の生態学）

研究内容は？

松枯れに関する生物の集団生物的な特徴の解析と生態的解析及びその数理科学的な研究。

研究を始めたきっかけは？

偶然。（大学でたまたますばらしい先生に遇到了。）

また、今の研究については、就職してたまたま松枯れをやらざるを得なかったから。松林は北西季節風から町や村を守る防風や砂防の役割を果たしていたが、昨今の松枯れで荒れてしまった。そのような松林は江戸時代に植林したが失敗し、その後ドイツの方法を導入してみたがうまくいかず、試行錯誤の末なんとか砂防林ができあがった。地域の人に大切にされている松林を守りたかった。

それから、松茸が食べたかったから。



マツノザイセンチュウ

学生の研究内容は？

榎木 松林における病原性線虫の集団遺伝学的研究

荒川 病原性線虫の水平伝播

野田 伝染病の拡大におよぼす病原体LOADの効果についての数理解析

松永 病原体の多回感染と病原力の関係

研究室には何種類虫がいますか？

全部で4種類。

繁殖させて何年も続いているものは

アズキゾウムシ 2年

マツノマダラカミキリ 9年

ヒラタコクヌスト 約30年

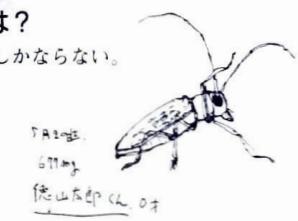
カラフトヒゲナガカミキリ 秘密

趣味は？

今はできない。いつか釣りに行きたい。

座右の銘は？

なるようにしかならない。



(取材：宮本尚登・鯨島和美)

学生に一言

遊ぶときと同じように一生懸命勉強して…。

ラオス旅行記

ラオスに親しみを感じる日本人は少ないだろう。こう言う私も今回ラオスへ行く事が決まるまでは、ラオスの風土はおろか、ヴィエンチャンという首都名さえ知らなかったという有様である。

私達の旅はバンコクから始まり、夜行バスで翌早朝にはタイ国境の町ノーンカイに到着した。これからメコン川に架かるタイ・ラオス友好橋を渡り、ヴィエンチャンへ入る。夜が明けたばかり。薄紫の日の出。牛を散歩させる少年。僧の托鉢。遙か遠くまで続く樹木、赤土の道。トゥクトゥクで町に向かう私達の目に飛び込んできたのは、まさしく森の国。

大勢の人で賑わう市場はタラート・サオ。日用品から文房具、電化製品、衣料品、ありとあらゆる物がここで売られている。この中には闇のレートで両替しようとする客引きがいて、銀行だと1\$=4300kip(99年3月)のところを6300kipで取り引きされていた。毎日毎日交渉でレートが上がっていく。

ラオフードは絶品だ。まずもち米のごはん。これが竹の筒のお弁当箱に入ってるてくる。手で食べるのだが、以外にべとつかない。そしてレモングラス風味の鶏そぼろと一緒に食べるともうたまらない。他には、昼食に最適の麺があって、たっぷりの野菜と共に各自で味付けして食べる。国産のビア・ラオは日本人の口に合うビールだと思う。田舎のほうではいわゆるゲテモノが一般に食べられているそうだ。かつてフランスの植民地だったこともあって、フランス料理、イタリア料理店も



いくつかある。地理的な近さから、タイ、ベトナム、中華料理も味わえる。

近年開放政策により、社会主義国ラオスにも海外から多様な情報が入ってくるようになった。特にタイのテレビ放送を受信できることから、タイの影響が大きい。ヴィエンチャンの人々は、タイに近代化的憧れを抱いている様だ。外国人旅行者も増えてきたとは言え、まだまだ珍しい存在だ。私達も、ただ歩いているだけでものすごい視線を浴びた。私達が外国人であることは一目でわかる。なんせラオスの女性は皆長い髪を一つに結び、ロング巻きスカートを着ているのだから。ショートカットにジャージ姿の私達は、中学生の男の子に「髪を切り過ぎだ」と言われてしまった。トランクの荷台にぎゅうぎゅうに乗り込んだ人々も、校庭で遊んでいる小学生達も、皆じっと私達を見る。ものめずらしそうに興味ありそうに。少し歩いて振り向くとまだ見ている。私達って何…? でも「サバイディ」(こんにちは)と言うと、みんなにこにこ返してくれる。シャイだけど好奇心旺盛、ラオスの人々に私はこんな印象を持った。

ラオスは確かに貧しい。先生は給料が少ないのでアルバイトをして授業を休むこともしばしばである。牛乳を飲む習慣が無く、弁当を持って来られない子もいるので、実際の年齢より体が小さく見える。しかし、なぜか人々はとても豊かに見える。子供を大切にし、お年寄りを敬う。恥じらいがある。日本人が古くからもっている気質と共通するものが感じられ、ほっとした気持ちになる。そこには目の前の事に忙殺されている日本人が忘れてかけている、生活を楽しむ豊かさがあるようだ。ヴィエンチャンには日本の救急車や消防車が走っている。いたるところに日本からの援助が見られる。私達はもっとお互いのことを知る必要があるのではないか?



両国の国民性に通じる部分があるとしたらなおさら、学び合える事も多いと思う。日本人の中でのラオス、ラオス人の中での日本の知名度はまだまだ上がる余地がある。

貧困であるラオスも、今後少しずつ近代化していくことだろう。いつかぜひもう一度ラオスを訪れてみたいと思っているが、その頃には道はすべて舗装され、ビルが建ち、コンビニが並んでいるのだろうか。少し寂しい気がするのだが、こう思う事は勝手過ぎると言わざるを得ない。しかし、ラオスはラオスに合ったやり方で変化していって欲しい。

(社会科学コース3年 横山 史)

1999年春、私達はかねてから興味を抱いていた途上国援助の現場に、実際に触れる機会を得た。東南アジアで教育、文化分野の国際協力活動を展開しているNGO団体、SVA(曹洞宗国際ボランティア会)ラオス事務所での2週間のボランティア研修である。

SVAは曹洞宗の僧侶がその資金を国際援助に役立てようと設立したNGOで、日本国内外において草の根の活動を広げているNGOの中でも規模の大きいものの一つである。現在、ラオスにおいては、教材開発配布事業、図書館事業、アジア子供の家事業、農村地域開発事業、学校建設事業といったプロジェクトを開催している。ラオスはアジアで最も貧しい国の一つで、GDPが350USS(1995)のLLDC(後開発途上国)である。小学校の入学率は50%、うち卒業できる生徒は41%という現状で、識字率も低く、公用語のラオ語でさえ出版物が1年間に数冊しか出版されない。そのため、本、教材といった類のものは圧倒的に不足している。SVAはそういうラオスの状況を改善するため、ラオス政府、国連、JICA等と協力しながら活動を広げている。

私達がお世話になった首都ヴィエンチャンの事務所には、子供向けの図書館が隣接し、毎日大勢の子供が訪れる。ここに置かれている絵本のほとんどは日本の絵本にラオ語訳をはりつけたもので、私達が幼い頃に読んだ覚えのある本ばかりである。その他、英語の絵本、ラオ語と80%共通するタイ語の絵本等にはラオ語の訳がつけられずに置かれている。国内には大人向けの国立図書館が1つ存在するのみで、子供の世界を広げる絵本は皆無である。そのためSVAでは、遠隔地に住む子供たちも絵本に触れる機会を持つことができるようになり、移動図書館事業を行っている。東京都立川市が寄贈した移動図書館の車に私達も便乗し、町から1時間半程離れた村を訪れた。この日、学校では内職に追われて先生が欠席ということで、午前中から多くの子供が集まり、珍客をものめずらしそうに眺めていた。